

ヒマラヤ登山：2008年の記録

池田常道（日本山岳会）

【中国】

1. エヴェレスト聖火登山

北京五輪に向けてエヴェレスト（チョモランマ、8,848m）頂上へ聖火を担ぎ上げようという国家イベントを成功させるため、中国当局はきびしい登山規制をチベットに敷いた。ネパール側でも聖火登頂が成功するまでは、ウェスタン・クウムより先へは立ち入らせないという強硬措置が採られた。エヴェレストのみならずチョー・オユー（8,201m）やシシャパンマ（8,027m）も登山禁止。エヴェレスト北面を予定していた各隊は大半がサウス・コルに変更するか計画を延期。チョー・オユーやシシャパンマを諦めてマカルー（8,463m）、マナスル（8,163m）、ダウラギリ（8,167m）などネパールの8,000m峰へ流れた隊も少なくなかった。聖火登山は5月8日に19人を頂上に送って無事終了。8月の五輪本番も成功裏に終えたが、チベットでは秋の許可発給が遅れ、チョー・オユーには10隊、シシャパンマには2隊が入山するにとどまった。

2. クーラ・カンリの遭難

10月1日、クーラ・カンリ（7,538m）北稜からの登頂と東峰～中央峰～主峰縦走を目指していた日本クーラ・カンリ登山隊（高橋和弘隊長）が北面の6,000m付近で雪崩に遭い、中村進（62）、加藤慶信（32）、有村哲史（27）の3人が犠牲になった。

3. 四姑娘山南西稜初登攀

いわゆる「ヒマラヤの東」、チベット南東部の

未踏峰や未踏査地域を計画していた隊（複数）が不安定な情勢を嫌って回避したが、規制の及ばなかった四川省では米国ペアが初登攀に成功した。チャド・ケログとディラン・ジョンソンで、四姑娘山（6,250m）の長大な南西稜をアルパイン・スタイルで初登攀したもの。標高差2,800m、全72ピッチ（V、5.11、A2、M5、AI3+）、期間は9月21日から30日の10日間だった。

【ネパール】

1. マカルー冬季挑戦と登頂ラッシュ

冬季未踏の8,000m峰6座（パキスタン以外では唯一）のひとつマカルーに2隊が挑んだ。ローノ・ベネト隊長ら3人のイタリア隊とデニス・ウルブコ隊長ら4人のカザフ隊で、いずれも年明けに入山して2月まで粘ったものの、強風と寒気に妨げられて登頂は成らなかった。最高到達点は前者がマカルー・ラ直下、後者が約7,500mだった。

そのマカルーは、春になってチベット登山規制の余波から22隊100人以上と空前の登山隊が詰めかけた。5月4日から21日の間に60人（うちシェルパ16人）が頂上に立った。日本からも労山全国連盟隊（近藤和美隊長）が隊員2人とシェルパ3人を登頂させている。秋にはスティーブ・ハウス、ヴィンス・アンダースン（以上米）とマルコ・プレゼリ（スロヴェニア）が未踏の西壁を目指したが敗退。アンダースンとプレゼリがマカルーII峰（7,678m）西壁の新ルートに登るにとどまった。

2. エヴェレスト登頂者4,000人

5月8日、中国聖火隊の登頂によって規制が解けたエヴェレストでは一斉にルート工作が再開され、20日のルート工作隊を皮切りに27日までの8日間で330人以上が登頂。中国聖火隊の19人を合わせて延べ登頂者数は一気に4,000の大台を超えた。隣接するローツェ（8,516m）にも18隊100人以上が殺到し、36人（うちシェルパ12人）が登頂に成功した。

3. マナスル登頂の真偽問題

春のマナスル登頂者は3隊十数人にとどまった。秋には約50人の成功が報じられているが、頂上手前から引き返した隊も少なくない。本当の頂上まで固定ロープがつながったのは10月5日のスペインTV隊によってで、それ以前、3日と4日の登頂者は手前から戻ったか固定ロープなしで頂上まで行ったかのどちらかである（マナスルの頂稜にさしたる困難はないから、もちろんそれは可能だ）。最高点まで行かずに登頂したと報告する例はクライアントを引率した、いわゆる商業公募隊に多く見られ、マナスル以外にもチョー・オユー、シシャパンマ、ガッシャブルムII峰、ブロード・ピークなどで目立っている。

4. アンナプルナとダウラギリ

アンナプルナI峰（8,091m）には5月19日に1人が登頂しただけだった。すでに8,000m峰13座を登っているピョトル・プステルニク（ポーランド）は北西壁から登頂を試みたが、あと150mを残して敗退した。東稜からはアレクセイ・ポロトフ（ロシア）が登頂したが、いっしょにアタックしたイニャキ・オチョア（スペイン）は頂上直下から引き返したあと最終キャンプで肺水腫を発症、各国クライマーが協力して救助に向かったもののついに助からなかった。

ダウラギリI峰もマカルー同様にぎわいを見せた。春の登山者は15隊約65人。23人（うちシェルパ1人）が頂上に立った。スペインのエドゥルネ・パサバン、オーストリアのゲアリンデ・カルテンブルナーはいずれも登頂に成功し、女性としては最高記録に並ぶ8,000m峰11座を達成した。

5. 6,000～7,000m峰の活況

アマ・ダブラム（6,812m）では4月30日～5月2日、フランチェスコ・ファッツィ（イタリア）とサンティアゴ・パドロス（スペイン）が西壁新ルートをアルパイン・スタイルで登った。85年山学同志会ルート（坂下＝有明）から取付いて左へ出てから頂上へと直登した。ネパール暦2065年とチベット民族への思いをこめてルートは「フリーチベット2065」と命名された（1,500m、V+、M5）。

カンテガ（6,779m）北壁は2000年にワレリー・ババノフ（ロシア）によって単独登攀されたが、そのときは固定ロープを使い、6,600m地点に抜けたところから引き返していた。フレディ・ウィルキンソン、ケヴィン・マホニー、ベン・ギルモアの米国トリオは10月下旬、壁の左寄りにある雪付きのいいラインを採り、最後は北東壁に回りこんで初登攀に成功した。横山勝丘、佐藤祐樹の信大OBペアは中央のダイレクト・ルートに挑み、6,500mで断念した。この2人は06年にも同じラインを6,300mまで登っており、今回が再挑戦だった。

ヌプツェ（7,855m）南壁では10月下旬、フランス・ペアが新ルートを登った。ステファヌ・ブノワとパトリス・グレロン＝ラバは1961年初登ルートの左にラインを採り、2回のピバーク後29日に頂上を狙うが、稜線に出たのは19時。登

3. 海外登山記録

頂は無理と判断してそこから下降した。幅6km高さ2,000mに及ぶヌプツェ南壁だが、こちら側から長い頂稜に林立するピークのいずれかまで達した隊は、61年主峰初登の英国隊と、03年のワレリー・ババノフ、ユーリ・コシェレンコ（以上ロシア）による東峰（7,804m）だけである。

ロールワーリン・ヒマールのテンカンポチェ（6,487m）は、正式解禁前の1984年に英国ペアが南面から東稜に出て登っているが、北壁は解禁された2002年以来8回挑戦されてなお未踏を誇っていた。ウエリ・シュテック、ジーモン・アンタマッテン（スイス）は4月にアンナプルナ南壁への前哨戦として北西壁に挑み、ビバーク3回で初登攀した。チェックメイトと名づけたルートは標高差2,000m、VI、M7+/M6、A0。アンナプルナは、前述したオチョアの救助作業のため中止された。11月には岡田康、馬目弘仁（松本クライミングメイトクラブ）が北東壁をビバーク3回で初登攀した。前記スイス隊のそれとは北壁中央ピラー（未踏）をはさんで反対側に当たるライン。北西壁、北東壁ともこれまでに東稜あるいは西稜に達したルートはあるが、頂上まで完成したのはこの2隊だけである。

関西学院大学山岳部の中島健郎と山本大貴は3月にメンルン・ラ近くのディンジュン・リ（6,196m）に東稜から初登頂した。中島隊長は昨年この山に挑んで6,132mで敗退していた。

メンルン盆地とロールワーリン・チューの境界に位置するカン・ナチュゴ（6,735m）が10月中旬、デイヴィッド・ゴットリーブとジョセフ・ピュリアー（米）によって初登頂された。1959年に福岡大隊がチベット側から試登してハーカンと呼んだピークである。今回の米国ペアは、まず南壁のヒマラヤ壁をたどって1,100mを登り、ビバーク。

翌日6,400mまで進んだが、降雪のため敗退した。次のトライは悪天候でも行動可能なリッジを求め、チェキゴとのコルから西稜をたどる。ナイフエッジの雪稜登攀は、アラスカでさんざん経験済みだった。2人はBCから3日目で頂上を陥れたが、下降は複雑な稜線を嫌って南壁に採り、その夜のうちにBCまで帰った。

【インド】

1. カランカ北壁とカメット南東壁

一村文隆（30）、佐藤裕介（27）、天野和明（31）のトリオはカランカ（6,931m）北壁を登った。この壁では1977年にチェコスロヴァキア（当時）隊が固定ロープを用いてチャンガバンとのコルに抜け、西稜をたどって登頂（第2登）しているが、直接頂上に達するラインは今回が初めて。9月14日にBC（4,500m）を発し、途中6,600m地点での停滞3日をはさんで22日登頂、24日BCに帰った。標高差1,800m、M5+、命名はBushido（武士道）。ちなみにカランカの初登頂は1975年、田辺郁夫隊長の上市峰窓会隊によって南面～西稜経由で行われた。

平出和也（29）、谷口けい（36）のペアはカメット（7,756m）南東壁を登った。BC（4,700m）建設後通常ルートの7,200m（ミーズ・コル上部）まで往復したあと9月26日BCを出発。28日5,900mにABCを作り、翌日登攀開始。6,600m、6,750m、7,000m、7,100m、7,250m、7,600mとビバークを重ね、10月5日登頂。通常ルートを下って7日BCに帰った。ルートはSamurai Direct（待ダイレクト、1,800m、M5+、AI5+）。日本人によるカメット登頂はこれが初めてである。

2. メルー北東壁

メルー南峰（6,660m）では韓国隊が北東壁を

初登攀した。一行は10日間をかけてC1 (5,570m) とC2 (6,150m) を建設。7月5日からキム・セチュン、ワン・チュンホ、キム・テマンの3人が上部岩壁を攻撃した。10ピッチにわたるヘッドウォールではもろい岩 (A4) に苦労した末13日に登頂。ルート名はゲート・トゥ・ザ・スカイ (VII、5.10、A5)。ボルト20本、リベット17本、ピトン3本と1,800mに及ぶ固定ロープの半分を残置したが、ヒマラヤで行なわれた最も難しいエイド・クライミングであったことはたしかである。なお、南峰はほぼ同高度の複数ピークから成り、1980年に東洋大隊が南東稜から初登頂した最南峰が最高点とされているが、今回の韓国隊は最も北寄りのピークに立っている。

この南峰と北峰の間にある中央峰 (6,310m) は、鋭い頂から北東に張り出す側稜がサメのヒレを思わせることから「シャークス・フィン」と呼ばれている。中央峰は2002年にワレリー・ババノフ (ロシア) が初登頂、4年後に鱈鱈同人隊 (馬目弘仁隊長) とチェコ隊が第2、3登した。この3隊はいずれも側稜上部の圧倒的なピラーを避けて右手の冰雪壁を登っているため、本来のシャークス・フィンには未踏のまま残されていた。コンラッド・アンカー、リーナン・オズターク、ジミー・チンの米国トリオは10月に上部ピラーをカプセル・スタイルで攻めた。17日間にバットフック用の穴13個を開けたほかりベット8本、ボルト3本を打ち込み、ピークやベッカーといったフック類を多用してピラー最上部に達したが、北東壁側に回り込んだところのオーバーハングが予想外に難しく、頂上まで100mを残して敗退した。

【パキスタン】

1. K2の大量遭難

K2 (8,611m) では10隊74人 (うち高所ポーター14人以上) が頂上を目指し17人が成功したが、頂上ピラミッドのセラック崩壊で11人が失われた。ルートは南東稜 (アブルツツィ稜) および南南東リブで、8月1日、肩に設けたC4から各隊が一斉に頂上攻撃を敢行した。その数少なくとも22人。ところが、難所のボトルネックでダレン・マンディッチ (31、セルビア) が転落死。その直後ジェハン・ベグ (パキスタン) も転落死してしまった。さらに、前日までに張られた固定ロープが不適切な位置にあったため、オランダ隊 (ウィルコ・ファン・ローイレン隊長=39) が中心となって張りなおす間、貴重な時間が空費された。このため何人かは頂上を諦めて下降した。

頂上にはまず15時、アルベルト・セライン (47、スペイン) が立ち、米公募隊のチリン・ドルジ・シェルパ (35、ネパール) が続いた。この2人と早めに引き返した数名は、21時ごろ起こったセラック崩壊の前にボトルネックを通過・下降できたが、あとの人々はその影響をもろに受けた。17時半に韓国隊のキム・ジェス隊長 (45) 以下5人とネパール人高所ポーター2人。18時にノルウェイ隊のセシリー・スコッグ (34、女性) とラルス・ネッセ (29)。19時にマルコ・コンフォルトーラ (37、イタリア) とジェラード・マクダネル (38、アイルランド)。19時半にウゲ・ドバルーデ (61、フランス) とカリム・メルバーン (パキスタン)。最後20時にオランダ隊のファン・ローイエン隊長、カス・ファン・デ・ヘーフエル (42) とペンバ・ギャルジェ・シェルパ (35)。

遅れて頂上に立った人々は順次下降に移ったが、21時ごろセラック雪崩がボトルネックを襲い、頂上手前で引き返したロルフ・ベー (31、

3. 海外登山記録

ノルウェイ) がさらわれた。後続していたスコッグとネッセは、固定ロープがアンカーもろとも失われた200mほどの区間を手持ちのロープでしのぎ、生還した。この雪崩は、上部で韓国隊のポーター1人とドバルデー、カリムも巻き込んだ模様だ。下降路を失った人々は上部でピバークを余儀なくされた結果、翌日までにさらに5人が失われた。生還したのはコンフォルトーラ、ファン・ローイエン、ファン・デ・ヘーフエル、ペンバ・ギヤルジェだけだった。

2. ブロード・ピーク冬季挑戦と新ルート

ブロード・ピーク(8,047m)では1月から3月にかけて、シモーネ・モーロ(イタリア)が前年に引き続いて冬季初登頂に挑んだ。パートナーのレオンハルト・ヴェルトが早々に離脱したため、パキスタンのシャヒーン・ベグ、クドラット・アリと3人でBCに入った。1月30日C1(5,800m)、2月3日C2(6,200m)のあとC3(7,200m)を出し、数度の頂上攻撃を行ったがいずれも失敗。3月9日の7,800mが最高到達点となった。

夏には12隊約120人が挑み、30人が頂上に立った。ガッシャブルムI・II峰に登った(後出)ヨーゼフ・コポルド(27、スロヴァキア)は同僚のヴラド・プルリクと頂上を攻撃。6月26日に一部バリエーション・ルートを採ったコポルドが登頂したが、プルリクは前衛峰でピバークの準備をしているところを目撃されたきり消息を絶ってしまった。竹内洋岳(37)と平出和也、ヴェイッカ・グスタフソン(フィンランド)が7月31日に登頂。竹内は日本人最高となる11座目、グスタフソンは14座完登まで1座を残す13座目に成功した。

ワレリー・ババノフ(44)とヴィクトル・ア

ファナシェフ(39)のロシア・ペアは、通常ルート西稜の付け根から左に派生する側稜(北西バットレス)を初登した。7月9日に取付き9日間を要して完登、17日に登頂した。グレードはVI、WI5、M6、3,000m。クリスチャン・トゥロムドルフ、ヤニック・グラジアーニ、パトリック・ヴァニョンのフランス・トリオはK2に備えた順応登山で7月6日中央峰(8,016m)に登頂。しかし、K2西壁の新ルートは悪天候にたたられ、試登に終わった。

3. ガッシャブルム山群

ガッシャブルムI峰(8,068m)では12隊約120名が挑み、19人が頂上に立った。前出のコポルドとプルリクは、北面ジャパニーズ・クーロワールから6月14日に登頂した。ロベルト・ピアントーニとマルコ・アストーリのイタリア・ペアは、I・II峰を稜線伝いに縦走しようと、まず6月15日にジャパニーズ・クーロワールから頂上を往復。ガッシャブルム・ラでピバークしてII峰東稜を登ったが7,300mで天候が悪化、断念・下降した。ペーテル・ハモル(チェコ)とピョートル・モラフスキ(ポーランド)は6月25日にI峰南西面のスペイン・ルートを第2登、北面へ下って同峰初の縦走に成功したものの、II峰東稜はガッシャブルム・ラで悪天候に襲われて断念。通常ルートの南西稜経由で7月6日II峰に登頂した。

ババノフとアファナシェフはI峰南西壁クルティカ＝ククチカ・ルートの左手に展開する氷雪壁を初登攀した。ピバーク中アファナシェフが落石で負傷したが、西稜に抜けたところで気力を回復、8月1日頂上に立ったもの。このペアは、さらにII峰にも新ルートを拓く計画だったが、BCに帰ってから天候が安定せず、ハットトリックは断念

した。フランスの冒険スキーヤー、ジャン＝ノエル・ユルバンは7月18日、ガッシャブルム・ラからの下降中クレバスに転落・死亡した。

ガッシャブルムⅡ峰(8,035m)には17隊180人が挑み、38人が頂上に立った。ただし、これらの中にはナイフエッジとなっている最後の稜線で引き返した者もあり、実際の登頂者はもっと少ないと思われる。昨年、雪崩で重傷を負った竹内洋岳は7月8日、平出和也、ヴェイッカ・グスタフソンとともに登頂に成功した。

スペインのホセ・カルロス・タマジヨ隊長(50)以下5人が8月1日、ガッシャブルムⅣ峰(7,925m)北西稜の1986年アメリカ・ルートから全員登頂した。隊長以下アルベルト・イニユラテギ(39)、フェラン・ラトーレ(37)、ファン・バレホ(38)、ミゲル・サバレサ(38)。39日間で3つのキャンプを設営して7月29日にBCを出発。C2(6,500m)、C3(6,900m)、C4(7,400m)を経て頂上に立ったもの。

4 ムスターグ・タワーの遭難

ムスターグ・タワー(7,273m)ではパヴレ・コジエク(49、スロヴェニア)がグレゴル・クレサル、デヤン・ミスコヴィッチとともに、標高差2,200mの北東壁をアルパイン・スタイルで試みた。ヤングハズバンド氷河のBC(5,040m)に入ってから体調をくずしたクレサルがヘリで救出されたため、コジエクとミスコヴィッチの2人で攻撃。8月24日の真夜中に出発し、15時間かけて本峰とその東にある約6,550mピークとのコル(6,300m)に出たペアはここでビバーク。翌朝は天候が悪いのでいったん下降しようと決めた。ところが、テント近くの雪庇に立っていたコジエクは突然崩壊した雪庇もろとも落ち、ミスコヴィッチが取り残されてしまった。衛星電話で急を知

ったスロヴェニアからベテランのトマジ・フマルとアレシュ・コジェリが派遣され、チャラクサ氷河でK7に登ったばかりの若手(アレシュ・チェセンら3人)も急遽呼び寄せられた。このトリオは26日にヘリでBCまで運ばれて捜索、コジエクのヘルメットとザックを発見したが、遺体は見つからなかった。フマルとコジェリも到着して救助作業を指揮。28日に、5,300mまで自力下降してきたミスコヴィッチをヘリに収容した。

5. スキャン・カンリ

スキャン・カンリ(7,544m)ではニコライ・ザハロフ隊長以下7人のロシア隊が西壁に挑んだ。1980年にジェフ・ロウとマイケル・ケネディ(米)が試みて7,070mまで達した壁だが、その後本格的な攻撃は行われなかった。今回の一行は6月23日基部にキャンプを設け、7月4日までに下部7ピッチをフィックス、翌日さらに5ピッチを付け加えて6,550mのビバーク地に達した。6日には8ピッチのロープを延ばして6,550mまで戻る。壁の中に適当なキャンプ地が得られなかったためである。翌7日、次のビバーク地(7,000m)目指して下部岩壁を登るが、この日から降雪がはじまってテントと壁の間に雪が入り、レッジから押し出されないよう一晩中除雪を強いられた。おまけに、高所経験のないエフゲニー・ベリヤーエフが翌朝高熱を発し、イゴール・ロギノフも意識を失った。一行は登攀を諦めて下降に移り、その夜までにBCに帰った。

6. トランゴ岩塔群

グレート・トランゴタワー(6,286m)ではステイン・イヴァール・グラヴダル、ビャルテ・ポー、シグルド・フェルデ、ロルフ・ベアのノルウェイ隊が5～6月の27日間を要して北東ピラーを再登した。標高差1,500mを誇るこのピラーは

3. 海外登山記録

1984年にハンス＝クリスチャン・ドーセスとフィン・デーリ（ノルウェイ）が初登したもののだが、2人とも下降中に転落死するという壮絶な結末を迎えた。その後1990年日本隊（木本哲ら）と91年スペイン隊（アドルフォ・メディナベイティアら）が再登したが、いずれも北東峰には立たずじまい。今回が24年ぶりの第2登となる。なお、ロルフ・ペーはこのあとK2に向かい、8月1日に頂上直下から引き返す途中セラック雪崩に流されて行方不明となった。隣のネームレス・タワー（6239m）ではジェリー・ゴア以下6人の英国＝フランス隊が9月から入山し、フリークライムを試みた。目標は南壁のユーゴスラヴィア・ルートとイターナル・フレームだったが、秋の寒気に耐えられず、いずれも敗退に終わった。

7. バトゥラ山群

バトゥラⅡ峰（7,729m）はキム・チャンホ隊長（47）以下10人の韓国ソウル大学隊が南面から初登頂に成功した。高所ポーターと固定ロープを使ってキャンプを展開し、8月下旬に隊長とチェ・スクムンが頂上に立ったもの。

ベッカ・ブラカイ・チョック（6,940m）はバトゥラ・ムスターグの1座。パトリシア・ディーヴォル（50、ニュージーランド）とマルカム・バース（44、英）の男女ペアが6月から7月にかけて南西壁を試みたが、南稜まで数ピッチを残す6000m地点で敗退した。イタリアのシモーネ・モーロとエルヴェ・バルマッセはバトゥラⅡ峰を目指してバルタール氷河に入山した。しかし、順応登山を終えてBCに帰ってみると、韓国の大部隊が予定したルートに固定ロープを延ばしはじめていた。同じルートをアルパイン・スタイルで攻めても意味がないと、こちらに変更した。8月初め南西壁に取付き、ディーヴォルとバースが敗

退した南稜のナイフエッジを突破して頂上ピラミッド基部でビバーク。翌日初登頂を果たすや一気にBCまで降りた。なお、彼らが登ったのは南峰で、北峰の方が高いとする異説もあるようだ。

8. ナンガ・パルバット

カール・ウンターキルヒャー（38）、ジーモン・ケーラー（28）、ヴァルテル・ノネス（36）のイタリア隊がチョンラ・ピーク（6,824m）西稜を初登攀した。7月1日に取付いて3日に登頂（第2登）。初登頂は1971年8月の岩峯登高会隊（海津正彦隊長）で、ルートは東面から。ウンターキルヒャーらは7月14日、ナンガ・パルバット（8,126m）のラキオト・フェースに取付いた。1995年に千葉工大隊（坂井広志隊長）が登ったルートの右手にあたるラインである。ところが翌日、ウンターキルヒャーが6,400m付近でヒドゥン・クレバスに転落、15mほど下で崩れ落ちた雪に埋められ、一晩中かかって掘り出したが、すでに手遅れだった。残る2人は下部の難しい部分を下ることができず、そのまま登り続けてジルバークラトへ脱出することにしたが問題は補給。これは19日に陸軍ヘリが食糧と衛星電話のバッテリーを投下することで解決した。ヘリの着陸できる高度まで自力で下りなければならない2人は北東稜へ向かい、22日6,600mまで下降。1日停滞後の24日には左ヘルートを外れて氷河の平坦地（5,700m）まで進み、そこからピックアップされた。

ルイス・シュティツィンガー（49）以下のドイツ山岳会（DAV）隊7人はディアミール壁を登り、6月21日に6人を頂上に送った。ガイドの仕事を終えたシュティツィンガーは、ヨーゼフ・ルンガー（29）と2人でマゼノ・リッジを目指した。頂上までの全長をアルパイン・スタイ

ルで登ろうとしたのである。山稜へのアプローチは峠越えを含む2日間、そこから7,000m近い小ピークの連続を越えて6日間でマゼノ・ピーク(7,145m)に達した。通算第2登。しかし、さすがにここが限界で、最も早くBCに帰れるルートを採用ことにした。1978年にメスナーが単独登攀したルートに向かってダイレクトに下降したのである。シュティツィンガーにはもうひとつ目標があった。ディアミール壁のスキー滑降である。7月14日、ハンス・カマーランダーとディエゴ・ヴェリッヒが滑降したライン(最大斜度60度)の6,810m(C3)から4,800m(C1)の区間を試走し、翌日16時半にBCを出て頂上を目指した。16日未明、登りだしてから21時間後には頂上の下300mに達した。日が昇れば雪質が悪化するので頂上は諦め、そこから滑降を開始。2時間で4,500mまで下り、スキーをかついでBCに帰った。往復24時間33分だった。